
リリカル アリシア

レフェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカル アリシア

【Nコード】

N0647Z

【作者名】

レフェル

【あらすじ】

転生者がアリシアに成り代わり、アーチャーと共に未来に飛び。フェイトと共に闘う楽しいハチャメチャ物語である。

転生者はチート？いえ、知りません

クロスする作品はFate/stay nightとFate/Zeroと魔法少女リリカルなのはです！

プロローグ（前書き）

嘘予告を本当の予告にしてしまった。

……ま、いいか。

のんびりと書いていこう！

プロローグ

研究所前

金髪のロングヘアーで緑のリボンで左右に髪結ってる女の子が研究所前で何かを見つめている。

いや、赤い宝石を見つめている。

「？あれ？あそこに落ちてる宝石は何かな？」

初めまして私はアリシア・テストロッサ。実は私、転生者なんです！

前世の記憶は、あまり覚えてないけど碌な事がなかったよう気がする。

でも、今は幸せ 優しいお母さんに一緒にいられる今が大切だから。

さて、今そんな事よりあの赤い宝石が落ちてる方に行かないと何か面白いことがあるそうだし

私は宝石の傍に寄ると信じられないと思いました。

だって英霊エミヤが半透明な状態で這^ハいずっていたから。

一瞬ボーとしてたけどこのままだとまずい気がするんで私は恐る恐る声をかけた。

「あ、あの。ど、どう……したの？」

声をかけた半透明な男は私の顔を見て、驚いていた。

そして、返事をしてくれた。

「……セイ…バー……？」

私は彼の言葉を聞いて静かに首を横に振りました。

「ううん。私はアリシアだよ。私の名前は、アリシア・テストロッサ」

これが私とアーチャーとの出会いだった。

アーチャー side

私がいつこの世界にどうやって来たのか分からないが一つ言えることがある。

それは……死にかけていると言う事だ。

「…ぜえ……くっ……あ………」

いや、消えかけていたと言った方が正しいだろう。

私は這いずりながら考え事をしている。

ふっ、どうやら世界は私が嫌いなようだ。

突然呼び出されたと思ったたらお前なんて呼んでない消えてくれと言ってるようだ。

しかし、私はきっと私をここに呼んだ理由があると確信している。

ゆえにここで消えるわけにはいかない。

だからこそ私は探した。私を呼び出した理由を……その意味を。

……だが世界は残酷だ。これ……以上存在は……できない……ようだ。

「う……あ………?」

視界が霞み、意識も薄れゆく。

深い……どこまでも深い奈落の底へと落ちていくようだ。

「あ」

もう満足に声も出せない。

自分が何かを言っているのか、それすらも分からない。

「

」

これで、終わりなのだろうか。

自分になすべきことすら見つからないまま消えて行くのだろうか。

込み上げる想いとは裏腹に、意識はどんどん暗黒へと沈んでいく。

ああ。もう何も視えない。

何も聞こえない。

何も感じ……ない。

もう……何……も

そんな中

「あ、あの。どう……したの？」

その声だけは はっきりと聞こえた。

幼い、少し戸惑いが混ざった声。

「……う……。」

暗闇に光がさす。

その声に意識を引っ張り上げられる。

朦朧とする意識の中、彼がみたのは

「……セイ……バー……？」

金色の髪が揺れる。

しかし、少女は静かに頭を横に振った。

「うん」

それが

「私は私の名前はね」

それが 青年と少女の出会いだった。

プロローグ（後書き）

感想と評価をお待ちします！

第1話穴は危険だよ！！

研究所の託児所

ロングヘアーの金髪で緑のリボンで左右の髪を結ってる少女はふてていた。

「暇〜！！」

少女の名前はアリシア。

今現在、研究所の託児所にいる。

そして、持ってきた絵本が全部見飽きたらしく、本をほおり投げていた。

「あーちゃー、かえってこないかな〜」

む〜とうなりながら私は呟いた。

こんなにも暇になるとは思わなかったよ

そういえば、アーチャーとの出会いは驚きの連続だったなあ。

この世界には魔導師しかいないから、アーチャーにはキツイだろうな〜。

昔を思い出すように私は目を閉じる

アリシアの回想

倒れていたアーチャーに対して私はスグに人を呼びに行こうとしていた。

「まってて！すぐにほかのおとなをよびにいつてくるから」

倒れていたアーチャーは、こう言った。

「いや、必要ない。なぜなら、私は消えるから」

「きえるって、どこにきえちゃうの？」

ゆっくりと首を振ってアーチャーが言うと私は不安そうに聞いた。

「この世から、いや…この世界から私という存在が消えてなくなる」

私はその言葉を聞いた時、ショックを受けた。

どんな因果かわからないけど、英霊エミヤに会えたのに。

かすかに前世の記憶にある英霊エミヤを救いたい気持ちがある。

そして、今もそれを大切に持っている。

そんな私の様子を察したのか、アーチャーは苦笑していた。

「君は変わっている。赤の他人に、それに私は人間ではない。

それなのに、自分のことように考えている。

もし、私を助けたいと思っっているのなら、君が私のマスターになっ
てくれるのかい？」

そして彼は指で赤い宝石の方を指で示した。

「え？」

私はアーチャーが示した通りに赤い宝石を掴んだ。

そして、宝石に触れた私は気づいた。

なぜなら、赤き輝きを放つ宝石は優しさを感じた。

人のぬくもりを感じた。でも、それがどんどん弱まっていた。

「君がその宝石に魔力で満たすことができれば」

でも、私には魔力がない。

どうすればいいか悩んでいたら、不思議な声が聞こえた。

その宝石からか何かなのかわからないけど。

何か呪文のように聞こえた。

気が付いたら私はその呪文を唱えていた。

“ 告げる。

汝の身は我の下に、我が命運は汝が剣に、聖杯の寄る辺なくとも
この意、この理に従うのなら ”

「 我に従え ならばこの命運、汝が剣に預けよう。 」

しばしの沈黙の後、宝石が光り出した。

その時、魔力が宝石に満ちたことに気づいた。

この時に私は意識を失いかけた。

「 選定の声に応じる、君が私のマスターだったんだね 」

アーチャーは嬉しそうに笑って言う。

「ここに、契約は成った。これより我が身は汝アリシアの剣となり
盾とならん。

君の命に従い、君の為に如何な霸道とて道を切り開く事をここに
誓おう。」

そのアーチャーの話聞いた私は安心して意識を失った。
それから意識を取り戻した私が見たのは心配していたお母さんとリ
ニスとアーチャーだった。

「それからだっけ。私達が一緒に住むようになったのは」

私が回想から戻ってきたときに謎の大爆発が起きた。
それに私は巻き込まれた。

それから何日たったのかわからないけど、意識を取り戻した時。
母さんがアーチャーがリニスが泣いて喜んだ…いや…訂正しよう。
一部の人が鼻血をだしていた。
なぜゆえ？

わたしは不思議に思いに頭に手を当てた時、不思議な感じの感触を
覚えた。

その時アーチャーは私の気持ちに気づいたのか苦笑して鏡を渡して
くれたのだ。

「え…ええー！！！！？」

わたしは驚きの声をあげた。なぜなら、私の頭の上に狐の耳があっ
たのだから。

呆然していると母さんとリニスが

「ますます、萌え要素があがったわ」

「ええ、上がりましたね」

と言っていた。正直いつて怖い。
うう…頭痛がするよ。

そんな私に苦笑いしてアーチャーが手を差し伸べてくれたので手を握る。

すると、どこか浮遊感を感じた。

不思議に思い、足元を確認すると…

「あ、あなーーー!!?」

思いつき声をあげて叫んでいた。

そして、アーチャーと共に穴へと落ちていった。

「なんでさー!!?」

と叫んでいたのを覚えてる。

それは私が聞きたいからね？

第1話穴は危険だよ！！（後書き）

感想と評価をお待ちしております

人物紹介

名前)

アリシア・テストロッサ

年齢)

5歳(穴から落ちる前)

9歳(未来に来たら)

容姿)

金色のロングヘアで左右を緑色のリボンで結ってる。
瞳の色は赤色。

銀色の狐耳を頭の上に狐の尻尾を生やしている。

性格)

明るく素直で優しい

持ち物)

赤い宝石のペンダント。

備考)

プレシア・テストロッサの愛娘。

とある転生者がアリシアに成り変わった。

前世の記憶を覚えていない。

英霊エミヤのことを大切に思っている。

リニスとプレシアの鼻血に若干引いてるところがある。

とある研究の爆発事故により、銀色の狐耳と狐の尻尾が生えた。

デバイス)

不明

魔力)

不明

【クラス】アーチャー

【マスター】アリシア・テストロッサ

【真名】エミヤ

【性別】男性

【身長・体重】187cm・78kg

【属性】中立・中庸

【筋力】D

【魔力】B

【耐久】C

【幸運】E

【敏捷】C

【宝具】?

【クラス別能力】

対魔力：D

シングルアクション

一工程による魔術行使を無効化する。

魔力避けのアミュレット程度の対魔力。

単独行動：B

マスターからの魔力供給を断つてもしばらくは自立できる能力。
ランクBならば、マスターを失っても二日間現界可能。

【保有スキル】

千里眼：C

視力の良さ。遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。
さらに高いランクでは、透視・未来視さえ可能とする。

魔術：C -

オーソドックスな魔術を習得。
得意な力テゴリは不明。

心眼（真）：B

修行・鍛錬によって培った洞察力。
窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す“戦闘論理”
逆転の可能性が1%でもあるのなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。

【宝具】

『無限の剣製』
アンリミテッドブレイドワークス

ランク：E \ A ++ 種別：????? レンジ：????? 最大捕捉：?????

アーチャーが可能とする固有結界と呼ばれる特殊魔術。
視認した武器を複製する。ただし、複製した武器はランクが1つ下がる。

防具も可能だが、その場合は通常投影の二倍～三倍の魔力を必要とする。

備考)

何の因果かわからないが、何者かによりミッドチルダに召喚された。
しかし、彼の周りに召喚者はいなくてその為に街を彷徨っていた。
消えかけていたらアリシアと出会い契約を果たした

人物紹介（後書き）

アリシア「どうも！ありしあです！」

アーチャー「アーチャーだ」

そして、作者です

アリシア「あんたさ。他の小説もあるのに手を出しすぎじゃない？」

アーチャー「まったくだ。愚かにもほどがある」

うぐぐっ…お前等、わたしをいじめて楽しいか！？

二人「うん」「めっちゃ良い笑顔

うわーん！お前等なんか大好きだー！！！！

アリシア「どつちなだよ」

アーチャー「どつちだ」

第2話 私とお母さんとフェイト

ヒュー！

ドサッ

「うゝん…ここはどこ？」

「うむ…私にもわからない。だが、アリシア。キミはいつ分裂したのかね？」

は？私はアーチャーが何を言ってるのか分からなかった。そして私の足元の方からうめき声が聞こえる。

「うぐぐ…だ、誰よ。私の上に乗ってる奴は！！」

「あ、貴女達は誰ですか！？お母さんから離れて！」

と、言う声が聞こえたので声が聞こえた方に振り向くと、……私がいた。

「ええーーーー！！？」

「ふう…状況は理解できたようだな」

私が叫ぶとアーチャーがやれやれと言ったように呟いた。

「理解できたのなら、さっさと降りてくれるかしら？」

下の方からとてつもない怒りに満ちた声が聞こえた。

「あ、すいません」

私達は急いで謝ってその人から降りた。

「たつく、どこのどいつよ。この庭園に忍び込んだバカは……」

下敷きになった人は立ちあがって私の顔を見て硬直した。
それと同時に鼻血を吹きだした。

ぷしゃああー！！！！

「わぷ！？」

私が驚いてから数分後、硬直がとれたのか私に似た少女を見て

「ふえ、フェイト。貴女いつから分裂したの？」

「お母さん、私は分裂してません！！」

少女を見て聞くと少女はきっぱりと否定した。

「ふむ……少し老けたなプレシア」

「ぴく）……その口の悪さは相変わらずね。アーチャー？いえ、シロウ」

どこか不機嫌そうな女性を見てアーチャーが言うと私は驚いた。

なぜなら、アーチャーの本当の名前はシロウだということに、今知ったのだから。

「ちょ、ちょっと待って！ツツコミをいれるのはそこじゃないよね！？」

てか、なんでお母さんのことあの人は知ってるの……！？」

と、少女が叫んでツツコミをいれた。

「アーチャーがいるということは。もしかして、アリシア？」

「そうだよ、お母さん」

アーチャーを見てやっと気づいたのか私に言うとは私は笑顔で頷いた。

「え、それって……私のお姉ちゃん？」

意外な事実を知った少女は呟いた。
そしてプレシアも困っていた。

「アリシア、お願いがあるんだけど。いいかしら？」

「ん？なに？」

お母さんがニコニコと笑顔で言うので私は聞き返した。

「ジュエルシードを集めて欲しいの。あの子と一緒に……フェイトとね」

そう言う少女の方に振り向くと最高の笑顔で言う。

「……へ？あ、はい」

少し呆然としていた少女は遅れて返事をした。
後に聞いたら内心複雑だったそうだ。

「では、頼んだわよ。アーチャー、けして二人に傷をつけないようにしてね？」

傷つけたら私がアンタをクロス」

「りよ、了解した」

お母さんが笑顔でアーチャーに言うとお母さんは苦笑いして答えた。

こうして私とフェイトのジュエルシード捜しが始まった。

お・ま・け

「ふえ、フェイトが二人に分裂したー！！？」

と、赤い狼が叫んでいた。

第2話 私とお母さんとフェイト（後書き）

アリシア「アリシアです！」

アーチャー「アーチャーだ」

そして作者です！

アリシア「お母さんのキャラ壊れてない？」

アーチャー「壊れてるな」

その方が面白いじゃん。

原作を壊してないんだから、良いと思うんだけど。

アリシア「そういう問題じゃない気がするんだけど」

いいじゃん、別に

さて、今回はゲストが来てます！

フェイト「あ、あのフェイトです！」

アリシア「フェイトも連れてこられたの？大丈夫？このゲスになにか」

あ、あれ？アリシアの性格が変なような？

アーチャー「仕方ないだろ。」

第3話 私とアーチャーとフェイトとアルフ

ここは海鳴市に建つ、とある高層マンションの一室でフェイトの部屋。

私達は今そこにいるわけで。

「えーっと、改めまして。私はアリシア・テストロッサだよ。貴女のお姉ちゃんになるのかな？」

「こ、こちらこそ。初めまして！フェイト・テストロッサです。」

私が自己紹介するとフェイトも慌てて自己紹介をした。

「緊張しすぎだよ、フェイト。リラックスしないと！」

「で、でも……」

いまだに緊張しているフェイトに私が苦笑いしながら言うとフェイトが困ったように言う。

うーん…どうにか和ませることができないかな。

「アーチャーも自己紹介しなよ」

「む？…そうだな。私はアーチャーだ。よろしく頼む」

「弓兵？…変な名前だね。あたしの名前はアルフだよ、フェイトの使い魔さ」

私が隣にいるアーチャーに言うとアーチャーは頷いてから自己紹介

をする。

するとフェイトの隣にいた狼さんが自己紹介をした。

「これで全員自己紹介したね」

「そうだな。…と忘れていた。これがキミのデバイスだ」

どこか満足気に言えばアーチャーが私にフェイトが持つてると色違いの物を渡してくれた。

「デバイス？なんで確か私には魔導師として資質がなかったはずだよ」

「ああ…確かに君には魔導師としての必要なモノ。君にはないからな。」

そのかわりと言えるか分かんが君には魔術回路がある。
つまり私と同じ魔術使いにはなれる。

それを利用して開発されたのがこのデバイスだ。
まさに君専用のデバイスと言ってもいいだろう」

私が不思議そうに言うとアーチャーが苦笑いしながら言う。

《はじめまして、マスター》

「わー！喋った」

受け取ったペンダントを見ていると声が聞こえたので驚いてつい、
声に出していた。

「つーか、アンタ魔導師じゃなかったんだ」

「うん、私も驚いた」

アルフが驚きながら言うのとフェイトも驚いて呟いた。

「ふむ、詳しい話は後にして…とりあえず、アリシア。そのデバイスの名前はバルディッシュ・フォルトだ」

「バルディッシュ・フォルト？」

アーチャーが私を見て言うのとフェイトが不思議そうに聞いた。

「ああ、君の持ってるバルディッシュの原型だ」

《その通りです。私の兄に当たります》

「へー、そうなんだ」

アーチャーがそう説明するとフェイトの持ってるバルディッシュが説明してくれた。

それに納得して呟いた。

「じゃあ、早速だが。では、アリシア。

そのバルディッシュを使ってセットアップしてくれ」

そう言うときビデオカメラをアーチャーが構えて言う。

「アーチャー、なんでビデオカメラを構えてるの？」

「ああ…アリシアが変身したら、プレシアにこれで撮るように言わ

れていたのだよ」

私が不思議そうに聞くとアーチャーが苦笑いしながら答えた。

《では、改めまして。初回は呪文がいますが、次からはセツトップで変身可能です》

「告げる。

汝の身は我の下に、我が命運は汝が剣に、バルディッシュ・フォルト、セーットアップ！」

シュッ

私はそれに頷いて頭に浮かぶ呪文を唱えることにした。
すると光に包まれていた。

光が消えると…私の姿は

「成功だな」

「で、できた…」

アーチャーが満足気に言うとは私は驚いて呟いていた。

私の姿はフェイトのと色違いの白い衣装の姿になっていた。
マントは黒いけどね。

「じゃあ、変身もできたことだし。そろそろ本題にはいろうか」

フェイトは軽く手を叩いてから笑顔で椅子に座った。

「そうだね、そろそろ本題に移ろうか」

アルフも同意して椅子に座った。

「そうだね」

私も同意して椅子に座った。

しかし、アーチャーの一言でその場の雰囲気が変わった。

「うむ…しかし…そろそろ。朝食の時間だ、材料はあるのかね？」

「「「は？」」」

アーチャーの場違いな言葉に思わず私達は何を言ってるの？この赤いの、と思った。

あ、でも…アーチャーには内緒だよ？

「何を言っている。良い考えをだすには朝食をとった方がいい」

「でも…材料なんてない。私達、コンビニ弁当で済ましてるから」

アーチャーが呆れたように言うとフェイトが苦笑いしながらすまなそうに話した。

「コンビニ？」

時間が凍る。

今までに味わったことのないほどの巨大なプレッシャーが私達を襲う。

「……それで？フェイトはしっかり食べているのか？」

「そ、それが」

「返答によつては穿つぞ。」

穿つ!?

日常会話では普通 聞かないよ そんな言葉!?!?

そんな事を考えるのと同時に、アーチャーの右手にいつのまにか赤い槍が現れる。

「ちよつ!?!?!?」

変な声を上げながらアルフとフェイトが飛び退く。

いや、正直聞きたい事や突っ込みたい事は山ほどあるのだけど、私達の残された野生の生存本能が狂ったようにアラートやエマージエンシーを発令する。

エ? ホンキデスカコノヒト?

(どうすればいいのこの状況!?)

正直に言う? いやでも全然食べてないとか言ったら本気でやられそうだし、

でも嘘を吐いたからって後でバレでもしたら...!!)

アルフの恐怖で凍りついた頭では冷静な判断などできるはずもない。焦りと混乱の中 アルフが出した答えは...

「オ..... オーデインスとかは」

「無い。」

まさに絶体絶命。

考えれば考えるほど、思考は泥沼へとハマっていく。

終いには涙目になって、意味不明な言葉を連呼するだけに……

そんなアルフの姿に呆れ果てたのか、アーチャーは一度深く溜息を吐くと

「……正直に答えてくれればいい。お前だって悩んできたことなんだろう。」

魔法も使う事も出来ない俺だが……もしかしたら力になれるかもしれない。」

なんというツンデレ。

いや使い方は間違っているかもしれないが、飴と鞭的なその言葉に、アルフは呆気なく陥落してしまったのだった。

「やはり……ほとんど食べていない、か。」

「うん……。初めはちゃんと食べてたんだけど。」

なんかありきたりに感じて飽きちゃったんだ……。」

落ち込むアルフとフェイトの隣で、アーチャーが捨てられた弁当の容器を睨みつけている。

「フン……まあ当然だな。」

コンビニ弁当など長期保存のために作られた添加物と防腐剤の塊にすぎない。

それを毎日3食も食べていれば飽きなど通り越して嫌悪すら抱くもの。

おまけに出費もバカにならない！

オルタがコンビニ弁当に目覚めてしまったあの日に誓ったのだ

俺は！！

そう

俺はああああ！！！！！！」

偏見と憎しみが混ざった言葉と共に、よく分からない闘志を燃やし雄叫びをあげるアーチャー！。

私はアーチャーの悲しき過去に涙した。

今になって気付くことだが、アーチャーの一人称がいつの間にか「俺」になっている。

まあ自然な感じがする分、そっちが本来の一人称なのかな？。

私としては、フェイトとアルフが初対面の変な緊張なんて持つことなく

話せるようなのでありがたかった。

第3話 私とアーチャーとフェイトとアルフ（後書き）

感想と評価をお待ちしております

第4話 私とフェイトとランサー召喚？

キッチンでアーチャーが料理をしている。

「なんだか、嬉しそうに見えるねえ」

「そうだね」

「いいな」

それを眺めていたアルフと私とフェイトは口ぐちに開いて言う。
ただ、フェイトの発言にアルフが硬直した。

「ちょ、フェイト！アンタにはあたしがいるじゃないか！」

ジャージャーと何かが焼けるような音。

時折交ざる金属同士がぶつかる高い音。

軽やかでどこか香ばしいその音は、まるで音楽を奏でているかのよう
に、一定のリズムを刻んでいる。

「お姉ちゃん、私もそれが欲しい」

「うええ！？これは無理だよ」

フェイトが私の胸元にある赤い宝石のペンダントを見て言うので私は驚きながら言う。

そんなことをしているとアーチャーが朝食を持ってキッチンから出てきてテーブルに並べる。

「私は無理だが、その代わりになりそうなのを拾ってきた」

どうやら私達の会話を聞いていたようだ。

アーチャーはポケットから蒼色のイヤリングを取り出してフェイトに手渡す。

「ありがとう！アーチャー」

「どういたしまして」

フェイトがとても嬉しそうに言うとアーチャーはふっと笑って答えた。

「うう…あたしがいるのに」

「えっと…どんまいアルフ」

落ち込んでいるアルフを励まして私達は椅子に座り

「……いたたきます。」「……」

4人一緒に手を合わせて言う。

テーブルの上にあるのは、炒飯、野菜スープ、冷奴、野菜サラダと
いった

比較的手のつけやすいものだ。

予めアルフがフェイトが小食であることを伝えておいたため、
量は私やアルフよりフェイトの方が少なめである。

あ、私は大食いじゃないよ？フェイトより、ちよっと多めなだけだからね？

フェイトはというと

「……………」

無言で炒飯にスプーンを伸ばす。

少しすすった後、ホカホカと湯気がたつソレをしばらく見つめている。

「……………」

「……………」

「……………はらはら」

気付けば何故か私たちまで無言になってしまっている。

一掬いの炒飯に注がれる4つの視線。得体のしれない緊張感が部屋に漂っていた。

数秒後、止まっていたフェイトの手が動き始める。

恐る恐る口へと運び、はむっと可愛い擬音とともに炒飯を口にした。

「……っ！……」

その瞬間4人の身体に力が入る。

すると

「お、美味しい……！」

驚いたように声を弾ませるフェイト。

その声と共に辺りを包んでいた緊張感が一気に吹っ飛んだ。

ブハアッ、とため込んだ空気が吐き出される。

思えば何でこんなに緊張していたんだろう？

正面にいるアーチャーにいたっては口から魂が出そうなほどの勢いだった。

その味がとても気に入ったのか、次から次へと炒飯を口に運ぶフェイト。

途中スープなどにも手を伸ばすと、先ほどと同じように驚き、よりいっそうその表情を明るくする。

「良かった」

その姿は何とも微笑ましい。

フェイトの楽しそうな表情に喜びの笑みを浮かべつつ、私も料理を口にする。

「美味しい」

「……」

私はあまりの美味しさに満面の笑みで言う。

アルフは思わず言葉を失っていた。本当に美味しかったのだろう。今までの食事が簡素な弁当だったからだけでなく、純粹にこの料理が美味しいものだというのが分かってくれたようだ。気付いた時には無我夢中で料理に手を伸ばしているアルフがいた。

その姿を横から見ていたアーチャーは、満足げに笑って

「アリシアには昔から食べさせていたから大丈夫だとはわかっていたが。

いや本当に良かった、フェイトとアルフが気に入ってくれて。

アリシアも満足みたいだしっておいしい！？

アルフそれ俺の！！俺のスープ！！！！」

アーチャーがアルフに向かって叫ぶ。

ああ、こんな楽しい団欒は昔と同じだ。

あど時はリニスが落ち込んでいたり、

お母さんがアーチャーの分まで食べようとしてたことが思い浮かぶよ。

「アーチャー。食器運ぶの手伝うよ」

「わ、私も」

食事を終え、食器を台所へと運ぶアーチャーにフェイトと私はそんな言葉を告げた。

アーチャーは最初 驚いたようだったが、優しい表情になると

「ああ。お願いしようかな。」

そう言って私達の頭を撫でる。

それがくすぐつたくて、でも心地よい。

アーチャーは思い出したかのように、あっと言葉を上げると、人差し指を立てて

「禁止。」

「「……へ？」」

突然の一言に私とフェイトは目が点になった。

「敬語は禁止。フェイトは俺の主人の妹なんだから、家来に敬語を使う必要はないだろう？」

「で、でも年上の人にそんな……。」

アーチャーは笑みを浮かべて言うけど、フェイトは戸惑っている。

「……その言葉は、アツチで何もせず寝転がってる、アイツにこそ相応しいのだが……。」

視線の先には、食った食った〜などと言いながらソファの上でだらんとしているアルフの姿。

「ま、それにやっぱり敬語ってのは堅苦しいしさ。

これから一緒にやっていくんだから、そんなのは抜きにしたいだろう？」

「……わかりました……。」

確かにアーチャーの意見は正しいかもしれない。
堅苦しいのは私達必要ないもんね。

「禁止。」

「あ……。わ、わかった……。いいですか？あつ。」

アーチャーが言うと戸惑いながら言うけど敬語になってしまった。

「はあ。」

「ありや」

これはしばらく時間がかかりそうだね、とヤレヤレといった感じで
笑みをこぼす。

フェイトも照れ隠しのように小さく微笑んだ。

すると、アーチャーはキッチンにあった台拭きを一つ取ると、アル
フの方へ力いっぱい投げつけた。

「こおらアルフ！サボってないでテーブルくらい拭け！！」

「ぶふああ！！？」

その後、鼻にクリーンヒットした台拭きを手にアルフがアーチャー
へ飛びかかって一騒動。

早朝とは思えないほどの騒がしさだが、その場所から笑いが収まる
ことは無かった。

冬の訪れが漂う海鳴市の早朝。

吐く息は僅かに白く、日の昇り始めた空は瑠璃色の雲に覆われている。

鳥の囀りも少なくまだ多くの者が眠りに在る中、そのマンションだけは周囲と異なる様態を表していた。

“ 告げる。

汝の身は我の下に、我が命運は汝が剣に、聖杯の寄る辺なくともこの意、この理に従うのなら ”

「 我に従え ならばこの命運、汝が剣に預けよう。 」

探索魔法を使うかと思いきや、フェイトは青色のイヤリングを握ってメモを読みながら言う。

「 え? 」

「 フェイト? 」

「 何してるんだい!!? 」

私とアーチャーと狼姿のアルフは思わず叫んでいた。

「 てへ 」

ペロツと舌を出すフェイトが可愛いと思った私はシスコンなんだろうか。

しばらくの沈黙の後青色のイヤリングが光った。
光が消えると誰かがいた。

「 おいおい、今度は子供かよ。 ま、十年後に期待か、こりゃ 」

相手は全身を青いタイツのようなものでつつみ、手には紅い槍を所持している。

その気配は常人ではないと分かる者には分かっただろう。

アルフは全身で警戒感を示しているが、アーチャーは何か腕を組んで考えているようだった。

男はそんなものはどこ吹く風とばかりにフェイトを見つめている。

一人男の異常さに気付けないフェイトは、二人の雰囲気やや戸惑いながらも

眼前の相手を見つめていた。気のせいかな男の視線はフェイトを値踏みしているというより、

どこか苦笑している。

「そんな警戒すんな、って言っても無駄だわな」

やれやれと両手を挙げて、男はフェイトの前で膝をついた。

それにフェイト達が揃って疑問符を浮かべた。何をするのかと、そう思ったのだろう。

すると、それに答えるように男はそのままの姿勢で告げる。

「サーヴァントランサー、召喚に応じ参上した。お嬢ちゃんがマスターって事でいいか？」

だが真面目だったのは途中まで。名乗りを終えると再び立ち上がり、フェイトの頭に手を乗せたのだ。

それをなぜか不快に思えない事に、フェイトは驚いていた。

その手は暖かく、自分を安らげるように、ぶつきらばうではあるが優しく撫でている。

そんなランサーの態度に、安堵した私が出た。

（フェイトも無意識に甘えているようだし、安心かな）

私の視線の先では、ランサーに撫でられる事へ違和感を感じない事に、

逆に違和感を覚えているフェイトと、そんな彼女にどこか楽しそうな笑いを浮かべる

ランサーの姿があった。その微笑まじさに私は一人小さく笑みを浮かべる。

本来ならば異常な存在であるランサーへもっと警戒をするべきだろう。

だが、何故かそんな必要はないと思えてしまうのだ。

それだけの安心感をランサーから感じるのが一番の理由。

それだけではなく、フェイトがどこか嬉しそうなのも大きいのだろう。

「え？ え？ ランサー？ マスター？」

「ああ。ま、主人って意味だ」

「主人？ ……えっと、多分違うと」

「フェイトから離れる！」

フェイトの言葉を遮るようにアルフがランサーへ叫びながら噛み付いた。

それにランサーは微かに驚きを見せたが、

それは噛まれた事ではなくアルフが声を発した事に対してだ。

一方、そんなアルフの行動自体に驚いたのはフェイトだ。

ランサーが敵ではないと理解出来たが、そんな彼へアルフが起こした行動は問題しかなかったからだ。もしここで喧嘩などになっては

不味い。そう考え、フェイトは何とかアルフを止めようとした。

「あ、アルフ?! 駄目だよ!! ランサーが怪我しちゃうから!」

そんなフェイトの言葉にも決して放すまいとするアルフ。

そして噛まれているにも関わらず、笑みを浮かべてフェイトを撫で続けているランサー。

そんな中、頑張つてアルフを引き離そうとするフェイト。

その傍から見微笑みながら見てるとアーチャーが私の頭を撫でくれた。

やはり、どこか安心してしまふ。アーチャーがいてくれるからだろうか?

第4話 私とフェイトとランサー召喚？（後書き）

感想と評価をお待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0647z/>

リリカル アリシア

2011年12月5日09時52分発行